

■ 総合セッション ■

---

クロスオーバー的視点にみる  
漢族・少数民族研究と新たな問題提起



総合コメント

渡邊 欣雄

瀬川 昌久



総括

加々美光行

座長

高明 潔

コーディネーター

馬場 毅

.....  
2006年7月16日

●**座長（高）** — それでは早速、総合セッションに移らせていただきます。

みなさん、長い時間ほんとうにお疲れ様でした。問題提起としては、お手元の予稿集の5ページに、今回のシンポジウムにおいて中心に議論していただきたい点が2点まとめてあります。しかし、これまでの議論はその問題提起の次元を大幅に超えていたと思われる。

総合セッションは、第1セッションから第7セッションまでの議論を踏まえて、従来分野、国や地域、民族ごとに行われてきた漢民族・少数民族研究の分業体制を見直し、今後の中国社会研究の向かうべき方向性を見据えた総合的な討議、および新たな問題提起を行うものであると設定されておりますが、これまでの先生方のご報告、特にたいへん興味深い各先生、各セッションのコメントをまとめてみると、これまでの議論はこの総合セッションの最初設定の次元を大幅に超えていたと思われるので、まとまらない気がします。しかしながら、渡邊先生と瀬川先生が私の隣に座っていますので、心強くなる一方です。

同時に、このような設定に対して、きっと批判の声もあろうかと思っておりますので、心細くも感じます。今回のシンポジウムの設定自体が非常に変わっており、参加者の方々、とくに渡邊先生のような大先生を戸惑わせてしまったことと思います。ですから、まとめは渡邊先生と瀬川先生にお任せさせていただきたいと思うのです。

それでは、各セッションのご報告とコメント内容を踏まえて、共通した問題点だけをあらためてまとめさせていただきます。

一点目が、「漢化」と「華化」について。これについて、今回とくに議論されましたが、華化という定義は、まず「中華」という定義とどう関わってくるか、そこになんらかの繋がりがあるのかという点を問題視したいと思います。それから「中華」プラス「民族」、すなわち「中華民族」というものが、果たして確立されたのかについても、この機会に是非ともお二人のご見解を聞かせていただきたいと思います。

二点目は、漢族研究と少数民族研究の相対化について。私は相対化を二つの枠組みに分けて考えております。具体的には、一つが「外側」と「内側」から見た漢民族と少数民族社会という相対的視点、もう一つは「内側からの研究」と「外側からの研究」という学問的相対化であります。研究領域の分業体制を打ち破るには、まず、この相対的視野が必要だと思われる。周星先生が松岡先生の報告に対するコメントの中で述べられた、少数民族地域での漢民族の位置づけをどのようにしていくかという問題も、この相対的視野にかかわるかも知れません。これについては、特に瀬川先生のご意見をうかがいたいと思います。

それから今日、梅村先生のご発言のなかでも触れられていたのですけれども、我々が少数民族地域の漢民族社会や文化（歴史認識や価値観）をどう見るか。どのような基準や視点に基づいて見るべきか。その反対に、漢民族地域で暮らしている少数民族社会や文化（歴史認識や価値観）を、どのような基準や視点に基づいて見れば、より客観的な結論を出すことができ、より鮮明な中国像が描かれるか、ということ。現状の分業体制では、それぞれの漢民族研究と少数民族研究の視点が打ち破れるのか、という問題があります。

三点目は、常に考えている私の個人的な課題でもありますけれども、研究者自らのアイデンティティと研究対象の設定の関係についてです。これは昨日、三尾先生のご報告のなかでも少し触れられていました。具体的に言いますと、少数民族研究であれ漢民族研究であれ、いずれも研究者個人個人によって行われるわけです。研究対象を選定する際に、研究者の個人的なアイデンティティがまったく反映されないとは言い難いでしょう。ここでいうアイデンティティは、出身的要因、文化

的要因、学問ディシプリン、政治傾向などを包括しているものです。私は言うまでもなくこのような個人的背景のもとに自民族社会、それに少数民族研究を続けてきています。そこで、相対化の視点を求めるにしろ、分業体制の見直しにしろ、このようなアイデンティティ＝個人的背景から抜け出せるのかどうか、恐らくこれこそ最大の困難な課題であろうと思います。少なくとも私にとってですが。

四点目は、民族の「共生」、あるいは文化的共生について。「共生」の定義にも関わりますが、例えば今日の松岡先生の報告に対して、「共生」か「同化」か、というような指摘があります。それらいずれにしても政治統合に関わると思います。「民暦」、それに「時間」というものに対する管理はその代表的なものでしょう。たとえば、梅村先生もきつといろいろな経験があったと思いますが、ウイグル自治区では新疆時間と北京時間の2種類の時間を採用しています。私はウルムチでよく時間が混乱し、待たされてしまったり、待ちきれなかったりしたケースが多かったです。ウイグル人と打ち合わせをするときは、「新疆時間ですか、北京時間ですか」と確認しなければなりません。王柯先生も同様の体験があると思います。これは「共生」とはいえ、国レベルの「時間」がなければ「国」というものも成立しないでしょう。やはり「共生」よりは「同一化」の傾向が強く見られると思います。

五点目ですが、田村先生のご報告のなかで出てくる口頭伝承について。口頭伝承の深層には、民族関係や力関係が隠れていると同時に、この二種の関係に操作される面もあると思います。というのは口頭伝承が状況対応的に語られる場合もあるようです。全く同様の事件・事項や人物であっても、それをめぐった語りが多重的に現れるケースがあります。これについてぜひ、お二人にお話しいただきたいと思います。もちろん参加者の方からも、ぜひご意見をいただきたいと思っています。

六点目として、暁敏さんの報告について。彼のようないわゆる「小民族」出身者の報告という行動自体から、近年中国のひとつの新しい動きを読み解くことができると思います。近年中国では、人口10万人以下の民族を「小民族」と定義しています。これら小民族出身者による自民族研究も、最近ますます盛んにおこなわれていて、今日の暁敏さんのご報告は、その代表であると思っています。こうした自己の存在がますます主張される「小民族」の勃興現象は、大規模民族集団がもつ民族問題への注目を緩和するには、ある程度有効かもしれませんが、新たな民族間関係図を形成するかもしれません。これについてお二人のご意見をいただきたいと思います。

最後の小嶋さんの報告と関わりのある問題ですが、報告内容は政治学領域の課題で、私としては取り扱いきれない課題です。ただし先ほどの梅村先生のコメントから、「定義」とその「時効性」に関する議論も行う必要があると思いますが、これも小嶋さんの報告に用いられた二種類の「民族主義」の定義、特に「中華民族」という定義とかかわってくる課題と思います。

ここで中国の新しい動向を一つ伝えておきたいと思います。王柯先生も周星先生もご存じだと思いますが、2004年の10月末に中央民族大学や北京大学の民族・宗教関連の専門家が集まって、中国共産党中央政治局委員会で、民族問題、宗教問題専門の講座を開いたのです。対象は胡錦濤主席を中心とする政治局の委員だそうです。

これと関係するのかもしれませんが、胡錦濤主席自体が中国共産党チベット自治区委員会書記を務めた経験もあるので、2005年以降現在では、昔のように「わが中華民族」(我们中华民族)という言い方の代わりに、「わが中国各民族」(我们中国各民族)という言い方も、常に公の前では持ってくるようになってきました。これは多元一体構造に基づいた中国政治が成熟に向かっているこ

との一つの例かもしれないのですが、少なくとも新たな研究の枠組みを与えてくれたのではないと思います。そこで、中国研究に関する数多くの定義やそれらの時効性に関わる課題も出てくると思います。

時間の問題で、問題提起はとりあえず以上ですが、よろしければまず渡邊先生からコメントをいただきたいと思います。

●**渡邊**— その前にこれは総合討論ですので、時間配分をどうしたらいいですか。その時間に合わせてやります。頭のなかにはいくらでも項目があって、ばらばらに言いたいことが山ほどあって、この時間を全部くれるなら、その項目を全部話しますが、総合討論の意味がなくなってしまいます。

●**高**— 先ほど言い忘れましたが、基本的には漢民族研究であっても少数民族研究であっても、「民族」という言葉が大変重要なキーワードであると思います。よろしければ、先生にこのキーワードを中心にお話を聞かせていただきたいです。

●**渡邊**— 「民族」という問題、これは前に触れたと思いますが、まずは中国の状況、このシンポジウムのクロスオーバーという視点。これは非常に特色があるということが、討論していくうちにだんだんわかってきました。コメンテーターが主役というのは、シンポジウムとして初めて経験いたしました。

確かにそうなりますね。発表者がセッションとは逆の報告をしたうえで、コメンテーターがセッションのテーマについてコメントするというのは普通逆ですが、なかなかいい企画で印象に残るシンポジウムでした。

私は漢族研究をやっていて、今日非常に象徴的に、このセッションの企画者である高明潔さんという少数民族代表者と、秦くんという大漢族代表者という一つの例を取り上げてみたいと思います。

この企画の発想は、たぶん少数民族研究者および少数民族の帰属意識のなかに、非常に明確に出てくる問題意識ではないかと思います。周辺に住む漢族地域では問題になるのでしょうかけれども、マジョリティーにとっては実はあまり問題になりません。少数民族とされて、日々異民族に接している、特に漢族に接している人たちにとって、この「民族」というのは、漢族に会うたびに意識せざるを得ない状況だろうと思います。ですので、こういうテーマは、まさに少数民族研究のなかから明確に出てくる問題ではないかという意味で、まさに高さんの民族意識をも下地にしたテーマであろうと私は思っています。

というのは、むしろ私が共感を覚えるのは、今回のセッションでは秦くんの発表なのです。漢族としては、なぜ「民族」を受け入れなければいけないのか。私も特に「民族」という言葉自体使わないような地域でフィールドワークしているのですが、そうするとむしろ切実なのは「戸籍」の問題で、これが流動人口になっていて階層化しているというのは非常に切実な問題です。そこには少数民族という民族問題が出てきません。例えば北京などは国全体の民族構成の比率と同じぐらいの比率ですけれども、漢族が90パーセントを超えています。そのようなところでは、やはり民族問題より戸籍問題のほうが重要であるということがわかります。

私はそういう状態のなかで、これまでずっと研究をやってきましたが、「民族」という問題について、一切私は書いていないわけです。この問題のテーマの専門家でも何でもないというところで話さざるを得ません。ですから、これからの話は非常に無責任で、実は根拠に乏しく間違っていると

思います。なにしろおととい韓国から帰ってきたばかりですから、コメントは何も用意していないのです。

早速始めたいと思いますけれども、民族問題に関しては3回これまで話をしたことがあります。同じなのですから、だんだんとみなさんから反論が出てくるかもしれません。最初は衝撃的なことを言って、同じことを渡邊が言うと、ぼろが出てくる。さて「民族」という概念が中国に入ったのは1899年、日本からだそうで、これは私の研究ではなくて、実は横山廣子さんの論文を読んでいたら出てきました。横山さんもどこかから引用していたはずですが、ちょっとそのへんの出典はわかりません。

1899年に「民族」という概念が輸入され、その当時の定義がどうであったかわかりませんが、いずれにしても「民族」というのはさまざまな定義がありますが、「歴史的に形成された出自、言語、文化を共有し、それに伴って共属感情を持っている社会集団である」ということです。歴史的に形成されて、しかも出自や言語、文化を共有しているわけです。かつアイデンティティを持っています。

これにはさまざまな人の定義があり、もちろん変遷を経てきているわけですが、そのへんも飛ばして言うのであれば、私の定義のなかで矛盾しているのは、出自とか文化というのは第三者でも判断ができるような基準。客観的ですが、共属感情というのは主観の問題ですから、そこにおのずとずれがあり、どちらを重視するかという民族の研究がいままでありました。中華民族にしても、個々のいまの識別された民族にしても、時代としては後の時代になってできたものでした。「共属感情を持たない」状態であったところに、突然「おまえらは何々族」と言われたあとで「そうですか」という感情がくっついて来たのが、これまでの「民族」ではないでしょうか。

たしかに日本から輸出されたとしても、それが定着していくのはそのずっとあとでしょうけれども、日本自体はどうだったかということを見ると非常に面白い。これは最近われわれの学術誌に与那覇潤くんが論文を載せているのですが、沖縄に対して「民族」という概念を日本政府はあえて使わず、それによって琉球処分を断行したというのです。つまり明治12年に琉球国を解体して沖縄県化したときに、日本は「民族」の論理をあえて使いませんでした。「民族そのものは知っていた」と与那覇くんは言っていますけれども。

日本が周辺地域を植民地化していった過程においては、そうやって「民族」という概念を努めて避けて、むしろ外へ向けて日本政府の見解を発信させるために外国人記者が「民族」という概念を使ったのですが、それをあえて打ち消すようにして、日本の政府は「民族」という概念を使わないで沖縄を統合しようとしていました。

どういう説明をしたかという、「沖縄は、これまで何百年にわたって日本政府が税金を取ってきた土地である。だから沖縄はわが国の領土である」という論理です。このステートメントをどこへ向けて発信したかという、ヨーロッパやアメリカに向けて発信したのです。全く「民族」という概念がなくても、外国人や大使館に対する説明として、当時はそれで通用したのです。

日本政府は1879年当時、「民族」概念を打ち消すようにして税制の問題を取り上げています。国というのは当然税金をとっています。そうやって海外に説明している。つまり、そこには「民族」の概念は出てこなくて、「国家」という論理が出てくるわけです。

時代は下って、やがて台湾統治のなかで出てくるのが「民族」です。台湾統治でも、もちろん1894年になってからというのではなくて、これは私も詳しく知らないので三尾さんに代わりたいたいぐらいですが、森丑之助などがいます。森は民族識別をしたというよりも、むしろそのような現場



に居合わせた、そういう役人ではないですね。

●三尾— 役人ではないです。

●渡邊— どの程度だったか、私もそのへんはよくわかりませんが、日本は台湾でかなり早い時期に民族識別工作をしていました。最近、私はそういう点で台湾研究に疎いし、原住民研究は私もやっていませんので、そのへんはちょっと雑学です。だから間違っているかもしれません。

そうやっていくうちに、日本なりに民族の識別工作を行い、こんにちのような台湾の族群社会の基礎を築いてしまいました。当時、九族はすでに日本人が識別していたのです。いまは十二民族になっていますが、その後の変化の基本をつくってしまいました。やがて 20 世紀。そして日本政府は、朝鮮統治に乗り出します。当時の朝鮮はどうかというと、識別工作をしたかどうかというと全然知らないけれども、しなかったのではないか。というか、一民族しかいなかったから・・・。

そのように、日本政府の植民地政策はけっこうばらばらです。時間によってばらばらなのか、地域によって違うのかわかりませんが、アイヌそれ自体だって、「民族」と言わず「土人」と言う、「土人保護法」が最近まであったように、「土人」であって「民族」ではなかったというぐらい、時期が違うのか地域が違うのか、日本の「民族」の認識は非常に不徹底でした。

ところが民族概念を輸入した中国のほうは、孫文のことはすでに出てきましたけれども、これと中華人民共和国時代の「民族」の概念とは全然輸入先が違うものの、いずれにしてもかなり洗練されたかたちで「民族」概念を用い、いまに至っています。私は先ほどの小嶋さんの発表はまとめにすごくいいなと思って、実はほとんど同じようなことをまとめようかと思っているのですが、現在はたぶん中国の民族政策の、その「民族」とはネイションとしての各民族だと思えます。いわゆるナリビリクが唱えたようなエスニシティとしての「民族」ではなくて、だから彼は「族群」といいますか、そんなもので考えようとしたのだらうと思えます。ネイションの上にネイションがあるという、中華民族多元一体論が一つのモデルとしてあって、決してそれだけではないのでしょうけれども、現在存在するということです。

そこで、また議論を台湾からしてみたいと思います。先に話したように、台湾ではいわゆる「台湾人」というのは、すでにネイションとして確立しつつあり、そういう意識も定着化しつつあって、あとはエスニシティ、族群というのがあって、族群ごとに委員会があるわけです。これは民進党の方針で国民党は違います。

「族群」とはどういうものかということ、「外省人」というエスニシティ、「閩南人」[0]というエスニシティ、「客家人」。そして「原住民」というのは一つでしたか、「平埔」[0]と分けていたかどうかかわかりませんが、「原住民」が一つ。そして先ほど私が言いました移民という新しく働きに来た、あるいは結婚して台湾に入ってきた人たちの規模があまりにも大きいものですから、それが最近、エスニシティとして認知されているわけです。

それがいわゆる多元一体論というようなこと、まさに三尾さんが発表されたような内容とよく似ているのですが、ネイションという「台湾人」があって、その下にエスニシティというのがあって、それごとに委員会があって、「閩南人[0]」はないようですが、その委員会に人類学者が関わっているわけです。人類学者が「民族」をつくった後で、現地の人びとに「民族」が意識され、意識された「民族」の人権、福利厚生を図るためにそのような委員会ができて、そのなかにまた人類学者が関わっていて、いろいろな条文なども起草しているわけです。

つまり、その「民族」を生産したのは人類学者ですし、再生産したのも人類学者ですし、その問題を解決するのも人類学者です。国民統治に果たす学者の役割という、伊藤先生の説明を聞いてわかりました。いま、まさに人類学者はそのような時代を担っています。台湾もそのとおりです。

同じようなことを中国に当てはめてみますと、ナリビリクの議論は不足しているのです。つまり「中華民族」が「台湾人」に相当する、その一つのイメージ、Imagined community のなかにあるエスニック・コミュニティです。それを「中華民族」というか何というかわかりませんが、一つでなければなりません。その下に、たしかに台湾のようにエスニシティ、族群がなければならないということです。

つい最近まで、私は中山大学の中国族群研究中心だったか、族群の研究センターがあるのですが、そこのメンバーでした。そこは族群を対象にして、いま一所懸命いろいろなことを調べていますけれども、族群というのは実は少数民族のいわゆる 55 民族だけではなくて、もっとあるわけです。「広東人」、「客家人」、その他「潮州人」というさまざまなカテゴリーも、一つの族群として調べているわけで、それをどんどん拡大するとかなり多くの族群がいまの中国にあるわけですが、だから塚田先生が報告されたように、たぶん「蔗園人」[0]も族群になっていくだろうと思います。

そのようなかたちで、もし中国全土に今度は族群という分類ができあがってくれば、台湾のようになってくるわけです。中国はまだそれには至っていません。まさに中国大陸のほうの「民族」というネーション。いまネーションにとどまっている。それだけに留まれば、実はけっこう「民族」そのものが虚構になってしまうのではないだろうか。

例えば、中国からみると、台湾の「民族」のなかで認知されているのは「高山族」だけです。「高山族」のみなさんということで集まってもらおうと台湾に行ってみますと、どこにもいないのです。「高山族のみなさん」と言ってもいません。つまり「民族」がいかにも虚構かという一つの例です。カテゴリーはあるけれども、実態は全くありません。

小坂井敏晶さんが書いた『民族という虚構』という議論は、その部分に関しては非常によく当てはまっていますが、56 という「民族」すべてには当てはまりません。一部の「民族」は少なくとも虚構です。探していけばさらにいくつか虚構としての「民族」が見つかるのではないのでしょうか。

「漢族」もたぶん虚構だろうと思います。実は「漢族」こそ虚構なんです。だから漢族化という意味での「漢化」もあるはずがない。

もう一度「民族」を定義しましょうか。「歴史的に形成されて出自を同じくし、文化などを同じくする共属感情を持った共同体」。大多数の漢族には、「民族」という概念としての共属感情はほとんどありません。つまり、「民族」という特徴がないからです。聞けば中原が族源だと言っている知識人もいます。中原から来たとか、黄帝の子孫だとか、族譜に書いてあるとおりに言う知識人もいますが、普段「漢族」だと意識する必要のない人びとに聞くと、「漢族」の特徴がないのです。先ほど言った「無徴」、マークされていないのです。「漢族」とはこういうものだというようにマークされていないので、「漢族」の大多数が識別工作の対象にならなかったのです。北京などは識別工作をしませんでした。だから「漢族」というのはゴミ箱に捨てていくような、その他大勢という感じです。だから統一的な一枚岩的な特色はないという意味で、「漢族」も虚構ではないかと思っています。

けれども実際、私とその虚構論に対して反対しているのは、そのようにして識別されて自らのものとしてアイデンティティを持って、そしていま生きているという、例えば高さんをはじめとした少数民族の民族意識を軽視することになる点です。これに対しては、これから「民族」をつくって

いくことに、われわれが積極的に協力をしていかななくてはなりません。

今日のお話のなかでも、いままきにつくっていくという「民族」がありました。私も「満族」の地域などに行きましたけれども、何しろ満族化しなくてはならないわけですから、トウモロコシの麺ほかいだいたのだけれども、満族自治区などに行くと「満族」の麺ということで食べさせてもらえます。それはたいへんなことです。ほかと違った固有の民族的特色をつくっていかななくてはならないからです。

これは笑ってられないと思うのです。虚構とは言ってられません。「仮構」（仮の構築）という、つまり構築されてはいない、構築主義のような安定した概念ではなくて、いままきに築こうとしている運動や意識は存在するわけだが、いまだに民族特色が伴わないような状態がいま起こっていて、一方ではそれに悩んでいるし、一方では安定しているかもしれないけれども、やがてまた他民族との相対から「民族」の特徴じたいが変わるかもしれないのです。非常に変幻自在な状態にある「民族」の中身というのがあって、そのような状態を「仮構」といってもいい気がしておりますけれども、中国の少数民族は、おおかた民族創造過程の渦中にあります。

台湾はその点で成功していて、どのような「民族」なのか教育の場でも教えています。あなたたちの言葉は違うし、風俗・習慣が違うしと。このあいだ学会で「タロコ族」の創造の発表がありました。私はその座長をしていましたが、いまはそうやって「民族」ができてつある。

学者が「民族」をつくり、その「民族」をつぎの世代の学者が調べ、こうして「民族」の特徴ができる、民族意識がめばえ、それをまた学者が構築主義として調べるという循環の輪のなかにわれわれ人類学者がいるものですから、「さあ、この状況をどうするか」ということです。われわれは「民族」を虚構だとして突き放して、現地の人びとの意識と乖離するような研究をし続けてよいのかどうか。私はもはやいけないだろうと思います。少数民族として彼らが努力してつくっていきこうというところに、人類学者も民族創造の運動に参加していかざるを得ません。

実は静岡大学の楊海英くんもまさにそのようなことを書いていて、自分のモンゴル民族を一方でいまつくっていると述べています。第三者の意見を求めるならば、台湾のような委員会をつくっていく運動と、エスニックグループ、族群という単位は、もはや福利厚生や福祉の単位だということ、われわれも自覚せねばなりません。あるいは人権の平等という単位でもあるわけですから、そのような人権を守るための運動に、われわれは協力していかななくてはいけないのです。それはこれまで民族研究をやってきた人類学のなかで、初めて経験するような問題ではないかと思えます。

何か私は問題提起できていないけれども、この辺で終わりということにいたします。

●高— ありがとうございます。それでは、瀬川先生お願いします。

●瀬川— 「まとめは瀬川がしろ」と逃げられました。そもそもこのプログラムを見たときに私は愕然としまして、総合コメントを頼まれるのはわかっていましたけれども、渡邊先生が先というのは全然予想していなかったのです。

渡邊先生が膨らませるだけ膨らませたところを、何か落ちを付けろと言われても大変なことだと思ったのですけれども、よくよく見ましたら、あとに加々美先生の総括と書いてあるので、これはよかったと思って安心しました。ですから私も言いたい放題に言い放って終わりにします。気が楽になりました。



まず、クロスオーバーという視点についてです。あらためて振り返ってみると、結局その有意義さを再確認することになったのですが、一見これは総花的で、豪華なメンバーが揃ったけれどもまとまりはつかないだろうと危惧していました。でも、下手にまとめるよりは、これだけ集まると新発見、あるいは再認識が非常に多くて、そういう新鮮な感動を大事にして終わろうと、そういうことをまず感じました。

ですから、クロスオーバーの成果として、ここで何か一つかちっとしたものをまとめるのではなくて、むしろもう少し未来に向かって開かれたかたちで終わってもいいだろうと思います。ほんとうに逃げ口上になりますけれども、そのように思っています。

地域研究として中国研究を、特にこの日本におけるわれわれの中国研究というものをとらえた場合に、非常に特殊な性格があると思います。ある意味では、ほかの地域の地域研究と比べて、ちゃんと成立していないと言えるぐらいの状態だと思っています。

対象が大きく、また研究実績も豊富であるだけに、ディシプリンごと、あるいは地域ごとに、同じディシプリンでも中国の北をやっている者、南をやっている者、少数民族をやっている者と非常に細分化されています。したがって人類学・民族学のわれわれの領域だけに限っても、実は少数民族をやっている人間と漢族を専門にしている人間、あるいは西北をやっている者と東南をやっている者、台湾をやっている者と大陸をやっている者の間で、きちんと話ができていくようで、実はそれほどまじめに議論をしていないのです。

互いが何をやっているのかというのを、こういう場でクロスさせる努力は不足しています。その再確認の好機としても、今回のシンポジウムは非常に意味があるだろうと思います。

さてその先ですが、漢民族研究と少数民族研究をどうクロスさせていくか。私は第1セッションの座長でしたが、時間が足りませんでしたので自分の言いたいことは全然言いませんでした。そのオープクエスションの続きは最後のところとで言いましたので、その手前もあって、それを少し含めながら私のコメントを述べさせてもらいます。

少数民族や、あるいは民族そのものを所与のものとして研究することに対して、秦さんの問い掛けがあったわけです。民族というのは人々の持つ多様な属性の一つにすぎず、人々の生活次元のリアリティーは別なところにあるというのは、いまの渡邊先生のご指摘にもあったとおりです。

これについては、単一のモデルで中国全体を語ることはなかなか無理があると思います。漢族の単住地域の、後進的と言ったら秦さんに怒られるかもしれないけれども、そういう農村地域、湖北省の秦さんのフィールドであるようなところと多民族地域、それから私がやっているような経済的な先進地域、威張るつもりはありませんけれども、そういうところではかなり状況が違います。

ここは私がやっている先進地域の例をお話しして、都市のその問題を考えたら、秦さんのお話とかなり様相が違ったものが論じられますけれども、時間がありませんしそういう趣旨ではないので、これは非常にしゃべりたいのですけれどもやめます。

そこで、初めから民族ありきの研究ではなくて、人々のリアリティーから民族を抽出していくという点について。あるいは民族というものがどのような場面で話題となって、利用され操作されていくかというところですね。この点に関しては、三尾さんの提起された研究対象設定の問題は非常に重要なものであって、これは台湾漢人についてだけ論じ得るものではなく、いまも渡邊先生がおっしゃいましたけれども、それを超えて議論していくべき非常に重要な問題であろうと思います。

公認された民族単位、そこで強調され、あるいは増幅される民族文化や民族特徴というものではなくて、さまざまなアスペクトで民族のあり方をとらえていくことは、今回の発表者、あるいはそ

れに対するコメントのなかで、いろいろなかたちで出てきました。

例えば漢化という視点。この漢化という言葉の使い方については、いろいろ議論があったところですが、漢化というかたちで提起された曾さんのご報告では、漢族との相互作用・接触のなかで生成、編成されるミャオの意識ということで論じられています。これは決して民族識別後のミャオだけを見るのではなく、長い時間的な幅を持ってそれを考え、いまあるミャオの姿を、台江県のミャオを考えようという視点です。

それから、在地で区別されているより細かな民族集団の共存状況については、「共生」という言葉が使われていたけれども、「共生」と言うと突っ込まれるので、「共存」と言ったらどうかというのが私の提案です。それを提示されたのは松岡先生のご報告だったと思います。こういう切り込み方もあります。

現在の民族境界には、簡明には落とし込めない地域的な伝承の問題、あるいは記憶の問題があると田村先生が報告されました。私がいま言ったような簡単なまとめではまとめきれない、非常に深い問題がありましたけれども、私が興味を持ったところはそこです。

単純な現在の民族境界や民族間の言説には落とし込めない、複雑な過去の記憶が語り返されるときには、そういう問題が常についてまいります。それはいまの現状ではなくて、さらに未来の民族に関する言説を生み出していく文化遺産と言ったらいいのか、そういうものの糧になっていくものでもあるのです。ですから、それは非常に重要な要素を含んでいるというご報告もありました。

それから少数民族地域の、在地の土着化した漢族の問題。これは塚田先生や周先生のご指摘なされたもので非常に重要です。

その点でいきますと、私が研究している華南地域は非常に多様な地方文化が存在し、漢族とも少数民族ともつかぬ人たちがおります。その先駆的な研究は塚田先生のご研究があるわけですが、私も恥ずかしながら海南島の漢族でいろいろ研究したりしています。これについても、具体的な話をしろと言われれば、1時間ほど時間をいただいているいろいろとお話しできますし、実はいまスライドも持っているのをお見せできるのですが、それはやめておきます。

公式的な民族では還元されない多様な文化的・社会的な差異、それは中国南部の特色だろうと思っていて、私は中国の南部を非常に魅力的に思っています。それだけでは中国全体を論じているときには足りないだろうから、北はどうなっているのかというのはいろいろ考えるところですが、昨日今日の議論のなかでは、そういう南北の問題を十分に展開できなかったのも、それは今後の課題かと思えます。

もう一つ課題として、都市の問題です。都市民族誌というのがちょっと不足している点は否めません。都市というのはまた、人口移動に伴う新しい複雑な状況をもたらしているわけで、そのなかでいろいろなものが生じています。新入者（新しくそこに流入した人）による新しい社会的リアリティーの発生、そこからエスニックな言説も生じてくる場を提供しているわけです。

それと同時に、さらに見落とされているのは伝統的な地方都市生活です。そうした都市生活者の文化についてのモノグラフは全然ないのです。地方都市ごとに、広東省に行けば広東省の地方都市一つひとつに実は独特の文化があって、そのあいだの差異化というものもあるのです。そういう非常に細やかな、ささいな差異化というものもあるのです。文化的な差異の端緒みたいなものがある、そういうものから少数民族との境界まで連続したものとしてとらえていく視点というもの、大いに必要になってくるだろうと思えます。

その点では、人類学者がやってきた仕事は非常に偏ってしまっていて、少数民族地域の少数民族も一

所懸命やるし、漢族もやるけれども都市民族誌については欠けているので、そのところの研究がこれからの課題だろうと思います。

次に、昨日私は統合的な議論の枠組みの不在を嘆きました。ともすると話は細分化して、それぞれの対象について理解して終わってしまうというのが、中国に関する文化人類学の悪い傾向だと思っています。共通のプラットフォームがなかなか見つからないのですね。中国の多様性を明らかにするだけであれば、それで終わってしまって、それはそれで対象に肉薄する研究の深化だと言えるかもしれないけれども、多様性を説明しただけでは実は何の説明にもなっていないと思います。

かつてのスキナーなどの時代は、いま見れば古くさいところもあるのですが、やはりプラットフォームがあって、それに乗ってみんなが議論したという興奮があったのです。いまプラットフォームになるものが何かあるでしょうか。

中華民族多元一体論というのは、いろいろな意味でたたき台みたいにして、みんなでつき合うプラットフォームを提供するのかもしれないけれども、それほど強力なものでもありません。ですから、このシンポジウムがその端緒たればいいと思うのですが、やはりクロスオーバーを持続的に展開するためにはテーマが必要です。最初はこれだけの人間が集まってクロスオーバーさせて、いろいろな新しい発見があつて楽しいのですが、それを持続的に展開するためには、やはりテーマが必要です。そこまで見つかったとは私は思えないのですが、ちょっと影のようなものが見えてきました。それは加々美先生が言っておられました漢化、華化の問題です。

これについてここでコメントすればいいのですが、それは次回のシンポジウムでと心のなかでご準備のようですから、私がそこへ呼んでもらえるのかどうか全然保障されておりませんが、そちらのほうにとっておくということで、私はこれ以上これについては言いません。

それから、複雑な国家社会を構成する諸原理の一つとしての民族というものが、どこまで有効な概念なのかということですが、これについては最後のセッションの小嶋さんの整理に非常に感心しまして、そのとおりでと思うところが多かったです。エスニックな多様性というのが国家統合のシンボルとして展開したという点です。ですからこれはベネディクト・アンダーソンをもじって、それを私なりにネーミングすれば、「幻想の多元性」というものかなと思います。

ただし、そこで認定される多元性とは区別されるものとして、先ほど私が言及しました生活次元に存在するいろいろな自他境界が存在します。べつに私はそこを本質化するつもりはないのですが、人類学者ですからフィールドで出会う経験を、まず海底の泥みたいなものとして考えて、そこに足をつけてから海面に顔を出して息をするという研究しかできませんので、その意味では生活次元での自他境界みたいなものが重要に思えます。そこには漢族のなかの細かな差異とか、少数民族と漢族の中間的ないろいろなものとか、歴史的な揺らぎとか、そういうものが全部入りますけれども、そういう生活次元で存在する自他境界というものと、幻想のレベルで構築された多元性というのは、非常に距離があります。

エスニックな境界、つまり生活次元でいろいろ存在している境界というのは、重複したり状況依存的であったり、揺らいだり消長があつたり、つまり消えたり生まれたりします。それは端的に言って、行政的指標あるいは行政の媒介として選び取られるものとしては、非常に操作性が悪い、難操作的なものなわけです。ですから、ジェンダーや年齢などという指標と比べても、非常に扱いづらいわけで、そういうものを国家の統合のなかに組み込んでいくときには、そのままでは組み込めないで非常に形式化していきます。あるいは固定化していくということです。多元性自体が国家により認定され、固定されなければいけないという事情がそこに出てきます。

国家側から識別され、あるいは組織され補強される民族というものがまずあります。それに呼応して新たに生成する民族というものもあって、それは暁敏さんのダフルの事例が、まさにヴィヴィッドに語ったかと思います。

それに対して、対抗原理として選ばれる民族もあってもいいかもしれませんが、これがどこまでいまの中国国内に存在するか。少なくとも私が見ている南のほうでは顕著ではありません。小嶋さんの言葉遣いでは「抵抗のナショナリズム」というものです。以上のもののほかに、生活次元で立ち会われるさまざまなわれわれ意識とか、自他区分という、たわいもないと言ったら怒られますけれども、そういう曖昧な民族もあります。

ところが、これらのあいだに矛盾とか相克とか、相乗作用を持つこともあり、シナジー効果を生む場合もあるのでありますが、そういうものを外側からとらえ返す作業こそ、われわれ人類学がやるべきことですし、中国という稀有の巨大社会においてその様態を解明していくことは、それ自体に非常に大きな意味があると考えられるのではないかと思います。

最後に、クロスオーバーということから言うと、この表題はあくまで少数民族、漢民族の研究ですけれども、実は今回のシンポジウムにはクロスオーバーの隠れた次元があります。それは中国出身の研究者の方々と、日本人の研究者の方々が両方参加しておられることです。そのあいだに隠し味のように、隠れた次元でのクロスオーバーがあって、そこも非常に重要な点だと思います。

高さんが先ほど提起されたもの全部に答えるほどの時間はありませんが、そのなかの3番目、少数民族研究あるいは漢族研究を問わず、個人の研究対象設定の背後にある個人のアイデンティティの問題、ここにつながっていくと思うのですが、基本的に私の立場では、これは他者研究です。たとえば、私の人類学は渡邊先生の人類学とは違うかもしれませんが、そこはわかりませんが、少なくとも中国の少数民族政策を評価したり、あるいは政策提言しようと思ってやっているわけではありません。それを目的としてはいません。

中華民族論を検討の対象にするとしても、それは評価の対象ではなくて、それを実践している巨大社会が目の前というか、隣にあるわけです。これを放っておく手はありませんから、非常に興味深い研究対象になって、それを学術的に分析していこうとしているのです。ただし、それは私だから言えることで、中国人の研究者の方々はそうは言っておれないだろうと思いますし、またそう言いきれないところが中国出身の研究者の方々の立場だろうと思います。

その両者の、根本的によって立つ基盤の違い、立場の違いというものを踏まえて、どうクロスさせていくかということが非常に難しい問題でもありますが、またクロスさせるだけのよって立つものの違いを持っているわけですから、それを展開していく意義があると言えるのではないかと思います。

ここにいらっしゃる中国出身の研究者の方々はみんな、日本留学組と言っていい方で、その意味では日本の学術研究の盛衰と一蓮托生と言ったらオーバーですけれども、共通の立場にある方々です。それとともに、われわれから見れば一種の宝です。ですから、そうしたわれわれの学術共同体をいかに維持発展できるかというのは、われわれ日本側の中国研究の存続を左右する非常に重要なポイントだろうと思います。さらに大げさなことを言えば、日本の学術的安全保障にもかかわる重要事項ではないかと私は認識しております。その意味でも非常に有意義なシンポジウムでありました。どうもありがとうございました。

●高— ありがとうございます。総合セッションは70分と設定されております。それでは、ご在



席のみなさん方で発言をしたいと思う方、あるいはご自身の視点から、ご自身の立場からの新たな問題提起をしたい方、ぜひお願いします。みなさん、たいへん疲れていると思いますけれども、どうでしょう。

●**中生**— 最後に発言します。瀬川先生の最後のまとめは、すべての発表に言及されて非常にいいまとめだと思います。

最後の1点だけ、ちょっと引っかかるところがありまして、中国の研究者と日本の研究者のクロスオーバーということで、「安全保障」というよりも、その前の「宝」という点です。たしかに日本人が中国に行くときは、基本的に「<sup>ワラシ</sup>関係」がないと現地に入れないわけですし、私たち日本の研究者が人間関係も含めて助力していただくということだけではなくて、ある意味でいま中国では完全に言われなくなった志を同じくする「<sup>トシチ</sup>同志」ですね。

日本の中国学の大きな特徴は細やかさだと思います。アメリカは方法論の斬新さ、中国のある意味での底の深さと比べ、日本の場合は日本の民芸品に見られるような非常に細やかな手法で全体像を描こうとするところです。これは日本のお家芸だと思います。そういうところを日本に留学に来て学んだ中国人研究者とともに、また私たちもそのなかで、それを専門的に切磋琢磨した状態で、新たに中国研究に立ち向かおうとするのが、たぶん日本の中国学の存在意義だと思います。

今回、ずっと日本語で討論できたというのが、たぶん改革開放以来の中国の大きな成果であったと思いますし、また日本と中国の関係も、私たちがはたして大陸でフィールドワークできるのだろうかという危惧を持ちながら、「仙人の会」をやり始めましたが、こういうかたちで展開してきたというのは、当時ではとても思い至らなかったことだと思います。

「同志」の関係を結んだ研究仲間とともに、中国で研究する中国人の中国研究とはまた違った、日本的な中国学の再構築という出発点として、今回のシンポジウムをとらえていきたいと思います。

●**高**— それでは次の方。三尾先生、どうぞ。

●**三尾**— いま中生先生がおっしゃった日本と中国の人類学者のことで、私も啓発されてひとこと申し上げたいと思います。

私は中国での調査経験はそんなにないので、どうしてもいつも参照は台湾になるのですが、台湾にしても中国にしてもある程度共通するのは、ネイティブ・アンソロポロジストが、その国の政治と非常にかかわらざるを得ないところがあるということです。そこでは立場性というのがすごく問われるようになります。

私たち日本人など、外国の研究者というのは、台湾の人々に比べればある程度そこからフリーであることができるし、私自身は台湾へ行くと、現地の台湾人研究者の政治的なものも含んだ情熱に引っ張られそうになって、シンパシーを感じる部分がすごくあるのですが、私はできるだけそこから距離をとりたくていつも自戒しています。

それはなぜかという、そういうところから離れて遠くから眺めたいというよりは、むしろ外国人であるが故の役割があると思うからです。例えばいまの原住民の文化復興とか何とかというものに対して、いろいろなアクターがかかわるわけです。現地のアクターだったり、知識人のアクターだったり、原住民委員会の委員の立場としてのアクターだったり、いろいろな層の人たちがいろいろな動きをしています。人類学者は人類学者としての立場で、現地によかれと思うことをやるわけ



ですけれども、私たちのような外国人の学者は、そういう現地の台湾人の学者の動きを、いろいろなアクターの一つとして相対化して見ることができるのです。そういうことによって、同じ人類学者であっても新しい角度から、台湾の人とは違う角度から相対化して、あるものの見方を提示して、そういうかたちで間接的にかかわり還元していくというか、そういうことができるのではないかと思うのです。だからそのようなかたちで、外国人の学者と現地、本国の学者のクロスオーバーというか、かかわり方があるのかなと思います。

外国人の人類学者の立場として、もう一つ言うるとすれば、昨日の私の発表に関して瀬川さんからプラットフォームの問題ということを言われました。先ほども言われましたけれども、やはり一つの地域、一つの場所を越えて議論できる大きなプラットフォームを持つことも、人類学者として私はやはり必要だと思っています。

一つの可能性として、先ほど「華化と漢化」というものが出ました。私はまだ華化ということについてきちんと理解できていないので、次回シンポジウムをやるときには、ぜひその仮説モデルとして、作業モデルとして華化は何かということを掲げていただきたいと思います。この「華化と漢化」というのは一つの可能性だと思いますが、それを一つの中国、あるいは台湾を含む中国のなかに閉じるものではないものとして、人類学としては持っていきたいのです。そのときに一つの地域、エリアを越えた概念として、どういうものと接合させるのか。もっとユニバーサルなものどう結び付けていくのかということまでいければ、すごくいいなと思いました。

最後に、それと関連して中国学というものについて。ここの大学では中国学センターという名前が付いていますけれども、私は中国学というのはい一つの完結した閉じたエリアの研究であるというよりは、むしろいわゆる中華文明との濃密な関係を持った、影響を受けた文化圏を対象に、そこを共通の土台にした研究というかたちで、緩くとらえていただきたいというのが希望です。以上です。長くすみません。

●高— ありがとうございます。次は吉原先生、どうぞ。

●吉原— 私はコメンテーターの時間をもらったときに、時間の配分を間違えたというか、プログラムを知らなかったとかいろいろあったので、ちょっと時間をいただきます。

言いたかったことの一つは、海外に出た中国人、元中国人と言うべきかもしれませんが、そういう人をどうとらえるのかという問題です。これも大陸や香港、台湾だけではなくて重要な問題ではないかと思えますし、これは自分の課題でもあります。

タイなどを見ていると、漢化の反対、あるいは華化の反対と言ったほうがいいでしょうか。脱中国化ということがおこなわれています。スキナーの研究では、「タイには華人はいなくなるだろう」というアシミレーション・パラダイムを出しているわけですが、実際に見てみると必ずしもそんなことはなくて、また逆に *Sinicization* が再構築されている現状もあるわけです。

もう一つは中国研究について。これはここのCOEの研究と学部の性質でこういう問題設定になるのですが、言わずもがなですが、中国研究を相対化する立場の歴史学、文化人類学の立場も、ある程度必要であると思います。中国研究だけの特色だ、中国の特色だ、中国人の特色だと言っていると、やはりそこにはちょっと問題が出るのではないかと思うのです。

そういう面で言いますと、例えば民族識別分類もやはり国の力が働いたというわけですが、インドのカーストも植民地支配を受けた状況下の国勢調査に基づく統計の資料化でそれが固定化されて

いったという問題が、類似の問題としてあるわけです。現代中国も一つの帝国だということが言えますし、無徴の漢族というのは合衆国の研究で言いますと白人と言えらると思えますけれども、これが十把一絡げになってマジョリティーだということになっていて、中国人や他のアジア人も入っているのですが1つに分類されてしまっているという、新しく **Race** にされていくというのがありますね。Asian という **Race** というのが統計資料のなかに、分類項目として出てくるということもあります。

ですから西洋史のアプローチ、他のアジア史のアプローチというのを、われわれというより私は学んでいかななくてはいけないなど、そういう反省をいたしました。

●**高**— ありがとうございます。馬場先生、時間はいかがですか。よろしければ最後のお一人でも、よろしいでしょうか。

●**伊藤**— ひとことだけよろしいですか。

●**高**— 伊藤先生どうぞ。

●**伊藤**— 部外者の立場からですが、大陸中国という膨大な多様な社会を、またこれだけの多くの研究者が集まって、こういうかたちをとって討論するのを見て、韓国研究とはかなり様相が違うという印象を受けました。ですから、多様であり一体性を述べて、まさに中国の現実をみなさんが分担しながら討論しています。

愛知大学にもお願いすることになりますが、こういう中国研究の体制として、COEでなくてもこういう機会を定期的を持つことは、中国研究に必須なのではないかというように思いました。私は部外者として参加させていただきました。ほんとうにありがとうございました。

●**高**— ありがとうございます。



●**高**— それでは最後に、加々美先生から総括および閉会の挨拶をお願いします。

●**加々美**— みなさんお疲れでしょうし、あまり長く話はしないつもりです。長くしゃべったら注意してください。

クロスオーバーという以上、互いに接触するわけですが、受け身の接触もあれば能動的な接触もあるわけです。ですからエスニシティをめぐるアイデンティティにかかわる接触の問題も、このなかではテーマの一つですし、研究者同士のクロスオーバーもまた重要なポイントだということを、瀬川さんにお話させていただいてたいへんよかったと思いますが、その場合にも同じように、受動的なものであるか能動的なものであるかというのは、非常に重要な意味合いを持ちます。

一般にアイデンティティというのは、もちろん抵抗のナショナリズムといったようなことから受動的なものとしても生まれますけれども、同時に簡単に言うと主体の側から、自ら能動的に何かを提起することによってアイデンティティが形成されていきます。三尾さんの台湾などの例がそれをよく示していますし、最後の小嶋さんのジェディディズムも、またそういう性格のものだったと私は思っているわけです。

その点で言いますと、瀬川さん、渡邊さんが大変重要なことをおっしゃいました。多元性という